

二次元ドリームノベルズ

きらら★キララ

KIRARA★KIRARA

さかき傘
挿絵：希望つばめ

魔法少女は
変わっていく...



試し読み版

18
未満

ともえ
十萌きらら

金髪のツインテールが目
を引く元気な女の子。使
いを引く元氣な女の子。使
い魔エマによって“魔法
少女キララ”に変身する
力を与えられ…!?

きらら★キララ
KIRARA★KIRARA
NTR 魔法少女は
変わっていく…

登場人物紹介



変身前

IP?

ピンク色の小さな使い魔。
人間の欲望を暴走させる
マカイジュの種を回収す
るため、きららを魔法少
女として覚醒させた。

ひらさか
平坂三ツト

きららの友達のひとり。
胸も大きく、体つきも大
人びたメガネ少女。おと
なしい性格。



こはま
小浜ライカ

きららの親友のボーイッ
シユな女の子。運動好きで、
いつもは体操服+ブルマ
の服装がトレードマーク。



みやしろしゅんや
宮代俊哉

きららの同級生。サボリぐ
せのあるクラスの問題児
で、根暗な性格の肥満少
年。

さやま
佐山アキラ

きららの同級生のキザな
男子。軽い性格で、髪を金
色に染めている。タダシと
は仲が悪い。

くにとり
国鳥タダシ

きららの幼なじみの元氣
な少年。よくケンカする
が、実はきららに淡い恋
心を寄せている。

もくじ

第8話	秋は恋の季節……魔法少女は今日もたいへん!	007
第10話 Aパート	熱っぼい? 魔法少女の冬	023
第10話 Bパート	熱っぼい? 魔法少女の冬	028
第12話 Aパート	聖夜の悪夢 魔法少女の変容	104
第12話 Bパート	聖夜の悪夢 魔法少女の変容	180
第13話	タダシの誕生日 魔法少女の日々	230

「今日出るの？ 出るの？」

「出るよ。スタメン」

「わあ♪」

来るときの空気はちよつとおかしかったが、二校の選手と応援団、計百人以上がひしめく学園に到着すれば、きららはいつもの顔に戻った。

「じゃあゴールね。絶対ゴール決めてよ」

「簡単に言うなよ……俺はキャプテンたちのアシストなんだから」
無邪気で明るく、あまりサッカーの勝手を知らない女の子の顔に。

タダシにはごくごく見慣れた――、

「うお、あの子誰？ ここの生徒？」

「めっちゃ可愛いじゃん、芸能人とか？」

——タダシ以外には、そのブロンド髪と抜群のルックスで、とくに相手校の選手や応援団の視線を抜群に集めてしまう顔。

やや人目を気にしながら、渡してくれるタオルで汗をぬぐった。

試合開始まではあと十五分。身体を温めるのは終えて、いまは各人ストレッチの時間である。

「相変わらずすごい人気だね十萌ちゃん」

「す、すいませんキャプテン」

先輩の西織（にじわり）が声をかけてきた。

本人や幼なじみのタダシはもちろん、第二学園の部員たちには、この注目はいつものことなので、わずかに苦笑する程度の話だが、

「でねでね、あの、アレがいいと思うの。くるって回ってキックするやつ」

「オーバーヘッドは試合じゃほぼ無理だよ」

「えー、情けないわねタダシ。やればできますよねキャプテンさん」

「はは」

そんな彼女に付きつきりにされているタダシはちよつと落ち着かない。

「きらら、あのさ」

「うん？」

ちよつと離れててくれ。試合直前の集中力が必要なときとあつて言おうとした。そのとき、

「サーセーン、遅れました」

観客をかき分けて二人入ってきた。

「ミイさん」

「おはよう、きららちゃん」

片方はきららのもう一人の親友で平坂ひらさかミサト。ぱつと顔を輝かせてあいさつする。

タダシはため息をついた。彼女とは少年も、ライカ同様、親しいのだが、

「遅いぞ佐山さやま」

「サーセーン、昨日の女がしつこくて」

ミサトがここに来ると言うことは、彼女にとってカレシにあたる男も来たと言うこと。

佐山アキラ。タダシにとってはチームメイトでもあるのだが……普段から練習はサボりがちなのだ。今日も来ないなら来ないで欲しかった。

「今日は？ 俺スタメン？」

「いや、今日はタダシで行く。お前は出番があるなら後半だ、アップしとけ」

「チッ……タダシかよ」

しかも無視したかったのに、名前が出たことでこっちへ目を向けてきた。

「おチビな誰かさんでいーんすか。頭の上越えられたら届かないっすよ」

「ッ……なんだと」

「やめろ佐山、タダシも、さつさと行け」

幸いキャプテンのおかげで衝突はせずに済むが、無駄にイライラさせられる。

「ま、まあまあタダシ。気にしないで」

彼が来てからやや引いていたきからも来る。

気分にもやつとしたものが残るも――。

「ねっ、それよりゴールだよ」

「ああ」

そんなとき、幼なじみの無邪気な笑顔はなにより力になる。

イライラはボールに叩きつけられればいい。気持ちを切り替えた。



タダシたちの学年で競うスタメン三棒、とくに層の厚いFWは現在、下の学年では彼とアキラの二強になっている。

技術、運動、練習量ではタダシが勝るも、アキラは練習はサボっても抜群にセンスがよくて戦力として充分。そのうえ、サッカーにおいて非常に大切な要素である身長が、タダシより二十センチ近く高い。

だからこそ負けられない。

身長が足りないなら、その分速く走り、ボールに食らいつくだけだ。

「タダシーーーーーっ！　がんばれーーーー！」

今日は背中を押してくれる声もある。

キャプテンが言うには、出番は前半だけで後半からは代えられる可能性がある。

ならばと体力切れを気にせず走りに走った。少年の足の速さは学年でも折り紙つきだ。相手校も決して弱くはないが、一人も追いつかせなかった。

「こっちだタダシ！」

「はいっ！」

受け取ったボールを弾いて全速力でゴール際へ寄せ、真後ろにいた西織にパスした。

間髪打たれるシュート……が、あいにくバーに嫌われる。

「ツンが……くそつ。すまん」

「ドンマイです。もう一回行きましょう」

相手のボールになるので自陣に戻る。

最中、チームのみんなに声をかけられた。「ナイスアシストだった」「あとちよつとだった」。五人の先輩たちも背中を叩いてくれる。

浮かれるわけにはいかないが、いまのプレーは我ながらよいできだった。少年は一瞬気を緩めて、

ついベンチのほうを見る。

「いぞタダシーッ！」

ベンチに一番近い応援席で、金色の髪を散らして飛び跳ねている幼なじみのほうを。思わず頬が緩んだ。先輩たち五人より嬉しい声だ。

が……。

「ッ……」

ふと同時に、不快なものまで目に入ってしまう。

ベンチに控えているアキラが、そんなきららに声をかけていた。

どうせ「でも結局決まらなかった」とか言っているのだろう。きららはムツとした顔でコートを指さして怒鳴っている。「いいから佐山君も応援して」と言ったところか。ミストが「まあまあ」と間に入ろうとしていた。

「はあ……っ」

また不愉快だ。タダシはため息をつき、

「行くぞタダシ、もう一回！」

「はいっ！」

そのイライラをぶつけるべく、ボールへと突進した。

相手チームはペースを握ろうと細かく回して……、

——ガッ！

その細かさが災いし、少年の突進の直線上にボールを置いてしまう。

「ナイス！」

再びキャプテンとツートップで駆け上がる。

こっちだ。最後にキャプテンからの指示が飛ぶ。少年は正確にそちらへ出し——、

しかし相手ディフェンスがそちらに意識を取られた瞬間、

「行けタダシッ！」

「ふふふ、国鳥くんが決めたときのきららちゃん、すごかったですよ、キャーって。わたし隣にいたから耳がジンジンします」

「あう、ご、ごめんミイさん」

ミサトにフォローされるまでもない。この会場であのシュートが一番喜んでるのは、チームメイトでもタダシ自身でもない、きららだ。

根が素直な彼女がヒネたことを言いたがるのが、ある意味で証拠である。

「……ふふ、ふふふっ」

そして素直なので、皮肉った態度は長続きしない。

嬉しさが爆発して、顔にも態度にも出てしまっていた。

「カッコよかったよタダシ」

「……まーな」

今度は少年がヒネくれなければならない番だ。彼女から目をそらして、赤くなりそうな顔を隠す。

そこでまたキャーッと歓声が上がった。

代わりに出たアキラが一本決めたようだった。背の高さを活かして、コーナーから流れたボールを無理やり押し込んで。

顔を見合わせるタダシときらら。二人して、敵もさるもの、と言わんばかりに苦笑してしまった。

認めるべきところは認めるべきだ。佐山アキラ。
自分ときららにとって、敵であることは間違いないが――。



そのときだった。

歓声に悲鳴が混ざる。コートของ空氣がにわかにな変わった。

全員が足を止め――いま揺らされたばかりのゴールのほうへ目を向けている。

「なんで……俺ばっか、決められなきや……！」

「え……？」

正確にはゴールの前。

前に立つ門番。敵チームのゴールキーパーの様子がおかしい。一目で分かる。

膨らんでいた。風船のように、ゴールをすっぽり覆うくらいのサイズに。

『これでどうだ！ シュートしてみろ！ 全部止めてやる！』

なにを言っているかは分からないが――。

『瘴ビョーマ気を感じるアメ！ きらら、変身アメよ！』

「は、はいはい」

どこからかまた別の声だ。

ぴよいつと真横で、ピンク色の毛玉が跳ねたのを見た気がした。だが――、

「くあ……」

急激にこみあげてきた眠気で急激に視界が歪む。ベンチに潰れるようもたれるタダシ。見れば周りのみんなもバタバタ倒れて眠っている。

最後に見えたのは――。

「オーバーヘッドパワーーーーーー！ ミラクルシューーーーーー！」

聞き覚えのある声の、よく分からない奇声と、

『なにアメかその変身ゼリフ』

「今日はこれの気分なの。オーバーヘッドってカッコよくない？」

コートの方へ。膨れ上がったゴールキーパーの方へ駆けていく、

――やはり見覚えのある金色の髪だけ。



『痴漢バス快樂急行天国行き、みなさまどうぞお楽しみください』

ハンドルを握る運転手が楽しそうにマイクを使っている。

直感した。種の持ち主は彼だ。

よく分からないが、この『痴漢バス』とやらを作るのが願いだろう。眷属と化した乗客たちは痴漢好きの男ばかりが集められ、狙われやすそうな年頃の女性を取り込んで好きないように陵辱する。

どうやらその性癖に本人は含まれていないらしく、運転手本人は楽しそうにバスをぐるぐる回すばかり。鏡を通しての眼福を喜んでいるだけのようだ。

「でええええいっつ！」

種の保持者さえ分かれば、エマがいなくてもできることは多い。筋力強化が解けていないのを幸いと高く跳躍するきらら。

天井を伝って一気に運転席へ——だが、

『バスの運行中は、危険な移動はご遠慮ください』

——シユルルッ！

つり革が生き物のように飛びかかり、両の手首にがっちり食いついた。振りほどけず、その場に吊るされることになる。

「んあうっ、このっ、ちよっ」

たったそれだけだが、きららには大打撃だった。

クラスでも背の順で前から数人目というところの彼女には、百八十センチの高さにあるバスのつり革は、背伸びしてようやく指が届く程度。

高すぎるのである。それが手首に来てしまつては、床に足がつかない。

なんとか空いていた椅子に脚を乗せて、宙ぶらりんになるのはふせぐが、

「おやおや、お嬢ちゃんいけいなあ吊り輪で遊んじゃあ」

「ひひひ、おっちゃんらがつもつと楽しい遊び教えたるでえ」

それで目立ってしまった。他に絡んでいた男らが何人か、こちらに目をつけてくる。

「やっ、えっ？ おじさんたち……まさか」

狼狽するきらら。

このバスがああ運転手の力で痴漢バス、つまり女性を痴漢するためのパーティ会場になつてゐるだろうことは想像がつく。

だが『痴漢』という行為は、もつと大人の、最低でも女子校生が遭うようなもので。幼いきららにはどこか他の世界のことだに思えていた。

自分がその標的になるという感覚がなかったのに。

「落ちないように支えてあげようねえ。おじさんの手に座ってごらん」

「へっへ、手は放しちゃうあかんで。おっちゃんなあ、お嬢ちゃんみたいなお子がバンザイしるのが可愛いてしーないから痴漢やつとるようなもんなんや」

「ひゅえっ、ひ、ひあああ、やめてくださいっ」

生地の厚い通学用制服のひだスカートの上から、わしつと双臀を掴まれる。

驚いて身をよじるも、つり革が外れず両手は動かせなかった。しかも持ち上げた両手の付け根、わきの下に巨大な手がくる。

「あつ、くひあ、ちょ、あうん、くすぐりたいですつ、やめ、やあんっ」

「こりゃあいい、外人さんだからかな。モチモチつとして子どもなのにいいケツしてるよ。将来はザー汁ぶっかけが似合うエロ尻になるぞ」

「ふつくく、でもまだまだ可愛えお嬢ちゃんや。わきの下もええニオイやなあ」

眼鏡をかけたサラリーマン風の男にお尻を揉みしだかれ、当惑していると、今度は広げた肩の下に太った中年が顔を突っ込んでくる。

お尻もそうだが……わきの下のニオイを嗅がれる。淫撫というか嫌がらせに近いマニアックなやり口に、少女は泡を食った。

(な、なんなのこの人たち。痴漢、つて……なにをするの?)

この三ヶ月である程度性に詳しくはなったが、『痴漢』に関する知識は、ニュースでよく言われる『お尻を触る』程度としか思っていないきららには、二人の相手は荷が重い。

ましてやいまこの空間には、女か、痴漢しかいない。

「ほんといいお尻してるよ。ほら、みんなに見てもらおう」

「え……やあつ」

スカートの後ろ側をめくられ、中身を掴まれる。

今日は寒さをしのぐため、普通のパンツの上に毛糸のパンツも穿いている。だが関係なしに両方まとめて上に引っ張り上げられた。

持ち上がって股間に、お尻の谷間に食い込む二枚のショーツ。ほぼ宙ぶらりんのきららでは腰を下に逃がすこともできず、Tバックのような形になってしまった。ぷるんと真っ白な小尻があらわになる。

「おい……見ろよ」

「へえ、やっぱ外人さんはちがうねえ」

その光景が車中の視線を惹く。

まだ幼く小さいきららだが、白人の血はすでに顔を出しており、金髪碧眼、白い肌以外にも、明らかに日本人とはちがう特徴が多い。



中でもとくにスタイルは、将来が楽しみなほどだ。これでもかというほど長い脚は先から細く、付け根にいくほど逆三角形に肉付きを増す。お尻自体はまだ小ぶりのだが、そこからウエストへ向け急反転して細くなるので、ヒップラインは理想的に丸い。

完璧なラインがオスを誘った。周りで他の女子校生を攻めていた男たちが何人か、こつちへ寄ってきてしまう。

「あーあー狼さんがぎょーさん来おった。大丈夫やでえお嬢ちゃん、おつちゃんが乱暴なことはさせへんさかい」

「あ、あつ」

上半身には相変わらず、関西弁の中年がべつとりへばりついている。

この男が地味に厄介だった。わきの下に置いた手を、肉付きの薄いバストや横腹、背中と、くすぐったがりな部分へ這わせ、的確に愛撫してくる。さらにはネットつく舌を出して可愛い耳をちまちま穴の中まで舐りながら、

「えっちな子やなあ、ひよつとしてバージンちゃうんか? 最近の子は進んどるなあ」

「そんな……あの」

「ほおれエロポッチちゃんが硬あなってきたで。こら中身が詰まってええおっぱいや、将来はポインちゃんになるでえ」

しつこくしつこく嫌らしい言葉攻めに合わせて、身体中を撫でまわしてくる。

(わ、わたしエッチな子じゃ……あう、でもバージョンじゃないし、でも、でも)

根が素直で人を信じやすいきららには、言葉攻めというのも効果が大きい。

言われればなんとなくそんな気分になってしまう。エッチな子と言われ続けていると、自然と身体がエッチな、この状況に馴染むような反応を見せてしまう。

「あうんっ、んっ、ううん」

上半身のくすぐったさに、下半身が、腰が跳ねた。

きれいに盛り上がったロリヒップが、ツンツンと右へ左へ踊る。男なら誰でも目を奪われる光景に、集まってきた男たちのボルテージも上がる。

『さあ痴漢バスは運行中でございます。みなさま後悔のないようご参加ください』

この場の支配者であるアナウンスの声がかかれば、数十という手が競って伸びてきた。

可愛らしい真っ白な丸みは、あつという間に大量の指にもみくちゃにされ、ぶざまに形を変える。剥きたてのゆで卵のような、プルンと完璧に丸い形状が崩れるのがまた男心を誘い、お尻だけでなく太ももにも、お腹にも新しい手が伸びてきた。

「やつ、くあう……やめてくださいっ」

きららにできるのは腰をふって逃げることくらいだ。

筋力強化は生きているものの、その効力は強すぎるので、男たちを蹴ったりはできない。ただの眷属である彼らでは大けがしてしまう。

腰を逃がすくらいはできるのだが……、

「暴れたらあかんで、もうスイッチ入ってるやん、あとは気持ちよおなるだけや」

またも中年がコンダクターとなり、

「おっちゃんが素直になる魔法かけたるで。ほーれ」

「んぐ……っ!？」

耳を舐めていた舌が下がってきたかと思うと、唇を吸い取られた。

あわてるきららだが、振りほどくより先に男は一度離れる。

そうして少女の抵抗を先につぶしておいて、またちゅ、ちゅと口元を舐めてきた。

「あう、あ、ああう」

翻弄されるばかりの少女。

やはりこの男だけ、この車内でも女への慣れ方が一味ちがった。浅く連続してキスしてはすぐ離すことで、『すぐ離れるのだから』と抵抗を心理的に奪っておく。心理的に、キスに頭を慣れさせていく。

そして少女の目に、どこかあきらめの色が宿った瞬間、

「さあやらしーべ口チューするでえ、ひひ、おっちゃんも楽しみや」

「あ、う……うううん……んふううう」

改めて舌を差しこんでくる。

これまできららがキスしたことがあるのは、アキラと俊哉。そのどちらともちがう攻め方だった。

寝ているところを強引に奪った俊哉とはもちろん。百戦錬磨の女殺しなアキラともちがう。子どもをあやすような切り口。それでいて差しこんだ舌はねっちりと幼い口腔を舐りまわってくる。

まず抵抗する気持ちを奪われたきららは、その不気味なほど優しい感覚に、振りほどくことができなかつた。頭を撫でてくれる大人の手を、子どもは素直に受けてしまうように。あつという間に唇を籠絡され、すると、

「んっ、んんっ、くふううう」

「おとなしくなってきたぜ。ほれ、パンツ脱がせちまおう」

「俺もチューしてえなあ、でもまずはこっちか」

「きれいなヒップですけど、やっぱり子どもか。まだ毛も生えていないようです」
腰の抵抗も弱まってしまふ。

毛糸とコットンのショーツ二枚、同時にぺろんとめくられた。Tバック状態だったので面積はさほど変わらないが、一番恥ずかしいところがあらわになってしまう。

お尻の谷間に外気が通って、恥ずかしさに目を細めるきらら。だがかっちり顔を固定されてキスされていると、口の中で踊る軟体の相手で手いっぱいだ。

ねちゅにちゅと卑猥な粘着音が耳の裏側ではじける。そのいやらしい音に、頭の中がジンと痺れてしまう。

(や……う、わらひ……きす、弱い……)

普段澄みきったブルーの瞳が、パールに濁って見えるくらい、発熱と涙の膜に潤んでいく。

降参を悟った中年が野太い腕を外しても、もうきらは横も向けなくなっていた。両手を縛る吊り輪もいつの間にか外れている。けれど自由になった手でしたことは、体重を預けている男にきゅつとしがみつくことくらい。

同時に腰から下も逃げる動きはあきらめて、

「おほー、見ろよもうエッチなお汁が出ちゃってるじゃん」

「まだ触ってないのにねえ、見られて発情しちゃったのかな？」

「こんな歳から露出とベロチューでコーフンしてるのかあ、こいつは将来有望だねえ」

男子は童貞卒業のチャンスだと、競って好みの女子を確保していく。中には浣腸を終えたあと肛門を無理やり割って吐きださせようとする者まで。

タダシたち消極的だったグループも、こんなご褒美が待つならばと、ひとり、またひとり饗宴に加わりだす。最後にはタダシ一人になった。

女子もまた、どうせ犯されるならと出すときを選ぼうとする。一番人気のアキラはもう売れているので、手ごろな相手だと連鎖的に決壊を始めた。羞恥心を保っているのはキララたち少数だけだ。

そのキララは悲惨なもので。

「早く代われよ、次俺の番だぞ」

「うるせーな、まだ入れきつてないって」

決壊させるハセックスチケットとあつて、可愛い子には当然男子が群がる。

「あぐつ、もお……やめ。ちよつと休ませてえ」

もう誰にされているかさえ分らない。矢継ぎ早に男子たちが群がり、ちゅーちゅーと冷たいエキスを注ぎ込んでくる。

直腸はすっかり薬剤で満ち、最初のころのような膨張感はない。すでに注入されたのが

十本を超えており、物理的にお腹が重くなっていた。

「ううう、ダメです。お尻めくらないでください。もれちゃう、もれちゃう」

ミサトにいたってはさらに悲惨で、三本のノズルを同時に含まされていた。

これではゲームにもならない。大量のノズルで伸ばされた括約筋は本来の役目を果たせず、しかも流し込まれる水分が呼び水となつて……。

——びゅちゅるるるっ！

噴射——というより引つかきだされる形で排泄に追い込まれた。後ろにいたのは大滝で、クラスで一番の当たりを引いたと大喜びしている。

「はぁーっ♡ はぁーっ♡」

覗き見たミサトの顔に、キララは胸を痛める。

一週間にわたるバイブ責めと苛烈な浣腸責めとで、すっかり夏休みどころに。奴隷に戻っているようだった。本人に当時の記憶はなくても、直腸に刻まれたマゾヒズムが表情に出ってしまった。

「ほら平坂、そのでっかいおっぱい見せてくれよ」

「ああん……♡」

もう男子の言うことに逆らえない。記憶上は処女の身で、うっとりしながら股を開いて

いく。

(「ミイさん……ごめん。ゴメンね」)

本人が悦んでいることが、彼女を守ろうとがんばってきた魔法少女にはなにより悔しかった。

「早く出せよ十萌え。さつきからアナルがキツそうにしてるぜ」

キララ自身もミサトほど乱暴ではないながら、しつこくしつこく様々な男子から薬液を打ちこまれる。

ブロンドヘアの可愛いクラスのマスコットに、邪念を抱く男子は多い。童貞卒業の記念を彼女で済ませたがり、我こそはと挑んできた。

一人一人しつこく肛門をマッサージして。チューブでねちねち皺をいじくり。ゆっくりゆっくり流し込んでくる。

「ううう……いや、いやあ」

魔素を遮断しているため一人理性を強く残すキララは、必死でいたぶりに耐えた。

赤を通り越して蒼白になってきた顔は、蠟を塗ったよう汗べつとりになっている。細かいあごから鍾乳石のようにぽたぽた落ちる量が地獄の長さを物語っていた。汗はコスチュームにも染みており、レースのひとつまみ、リボンの先まで伝うほどだ。

(あああ……しっかり、しなきゃ)

なによりおぞましいのは、この悪夢のような状況で、キララにとって最も恐れるべき病魔。身内に巣くうマゾヒズムが疼きだしていることだった。

涙をこぼしたあたりから、頭の中にふわふわと強烈な酩酊感が湧いている。

ジェットコースターで落ちていくときの、体内に風が入っているような感覚。腿の途中からおへその下にかけてが自分の身体ではないような気がする。腸壁の重さだけがぼんやりと感じられた。

放置された秘苑もまたずきんと淫らな疼きを催す。膀胱が跳ねた。無意識のうちに妖しく腰をくねらせるキララ。

「へへっ、とどめ」

また一人分の注入が終わる。すると、

——きゅぶぶぶつ。

「あああ……っ」

ノズルを引き抜くとき、淡桜色に濡れた粘膜の隙間をぬって、空気が飛び出してきた。

放屁——ではない。イチジク型の浣腸は握っただけでは全部入らず、容器に少量が残るので、入れる側は一度空気を戻してギリギリまで注入したがる。そのとき一緒に入る空気

が逆流しただけ。

ただ出ているものは空気でも……。クラスのマスコットのおならに興奮した男子たちは、いつしか空気も競って注入してくるようになった。

キララにすればたまったものではない。

(恥ずかしい……。うぐつ、う、ううう波があ)

空気が括約筋を通ると、腸壁はもうパンパンになっている液体もついでに出してしまいたいと蠕動する。キララにはいちいち拷問だった。

「さあ、残るはキララとライちゃんだけ。優勝はどっちだ？」

俊哉が声をあげた。

お尻を締めるのでいっぱいになっていくうちに、いつの間にか教室は乱交会場となっていた。二人の女子を除いた全員が破瓜を散らされ。運良くペアになれた男子はもちろん、当たらなくても我慢できなくなったものは、口を使ったり手を使わせたり、好みの女子に幼い勃起を押しつけている。

残るは理性の残るキララと、そしてライカだけ。

「く……。う、痛い、腹いたい」

ライカが残ったのには、いささかペテンがあった。

先ほどから俊哉しか浣腸していないのである。支配者の力で文句を言わせず、彼女だけは独占していたぶっている。浣腸もまだ三つ目というところだ。

「うぐ……う、も、やだ。もおやだよお」

対するキララは、普段くびれているお腹が水風船のように膨れるほどの量を注入された。お腹の中は冷たいばかりで、お尻の穴をチューブが通る感覚はあっても、体内でなにかを出されている感じがしない。ただゆっくりと、着実に直腸の限界量が近づいている。

「ほらほらあ、さっさと出せよ十萌」

男子たちの声が遠くから聞こえた。

キララはもうほとんど意識が飛んでおり、言葉の意味さえ理解できないでいる――。

「……きさら」

ただ一人の声を除いて。

「なんだよタダシ」

「順番守れよ」

他の声を無視して、ずっと成り行きを見ていた少年が後ろにしゃがむ。

「もういいから。我慢しなくていい」

そっと優しく背中に触れてくれた。

魔素のせいではいまの彼に、このゲームをおかしいと思う気持ちはない。

だが幼なじみが。キララが苦しむ状況だけは別だ。他を押しつけ、ゲームのルールを破つても、助けに入ってくれぬ。

「ただ……し」

少年の与えてくれる優しく無条件な心地よさは、幼なじみの最後の堰を切るに充分だった。

——~~~~~……っ！　　ッ！　　~~~~~っっ！！

形容しがたい音とともに冷たい水分が逆流する。

タダシはその現場を独り占めして少女の腰を抱き、肛径が広がりそうな勢いで吹きだすすべてを受け止めていった。

☆

「おめでとライちゃん。チキンレース優勝は君だ」

最初から彼女狙いだったのだろう。バケツにまたがらせたライカの腹を愛しげに撫でる俊哉。

「お祝いに僕がじきじきに処女膜破いてあげるからね。ヒヒヒ、早く出しちゃいなよ」

「ああ……♡」

自分が一番なんだから。という免罪符を得たライカは、恥じらいながらもぎゆるぎゆると唸るお腹の衝動にさらわれてしまう。

排泄という魔悦は、人間が赤ん坊のときから開発される最も身近な官能だ。性に無縁なライカでもそれは変わらず、人前で、パケツの中にひり出すという状況にもかかわらず、あまりの感覚にウツトリと頬を染めていた。

女子全員分の異臭が渦巻く中、パーティは一層混迷を極める。ミサトや姫妃など可愛い女子は、一度に五〜六本のペニスを相手させられるほど。フェラチオ、二穴、二度目の浣腸と、思いつく限りの荒淫が催されている。

キララにとって幸運だったのは、ひとつだけルールが守られていることか。最初の一人は、浣腸を受け止めた相手だけ。

「きらら……」

「タダシ、任せて、私。私——」

寝転んだ少年にまたがるキララ。

成長途中で筋肉の薄いタダシだが、ペニスだけはしっかり男らしい硬さを示していた。

「タダシ、タダシ……」

浣腸による決壊で、身体どころか心の中身まで抜け落ちてしまったように、キララはもうゲームへの反抗心を忘れていた。

どちらにしろいまゲームを拒めば、周りの男子たちに捕まり嬲られるだろう。ひとり肌を重ねる相手を選ぶなら――、

（タダシ……温かい）

彼がいい。

なにより疲弊し、お腹を中から冷やされた身体が、幼なじみの温もりを求めていた。

勃起の硬さに反応したクレバスが口を開ける。包皮をかぶったままのふにゆふにゆした穂先にとろおつと濃厚な蜜が伝った。

――にぐり。

「あう……、っ、あああ……タダシ」

位置を定めて真下へと腰を落としていく。

クラスでもひと際子どもっぽい肢体が、他の誰よりも悩ましげにバウンドした。

（タダシとしての。えっち……セックスしてる）

嬉しいような悲しいような。開きやすくなっている涙腺からぼろぼろと大粒の涙がこぼ

れた。

心から思いあう二人だからこそ、この快樂と狂気の祭典で初めて結ばれることへの葛藤は深い。

無理やり処女を奪われた夏休みから、『陵辱』と『愛の儀式』は別物だと思うようにしているが、いましていることは愛の儀式と言えるのか、胸を締めつける。

ただそれにも増して、つながった部分のもたらす幼なじみの温もりは心地よかった。

「うぐ……っ、くうあああ、きららっ」

少女の内部はとかく狭くて食いつきがいい。入り口のところで包皮が噛まれるので、中へ進めるのは刺激に慣れない亀頭部だけだ。

剥けるようになったばかりなのだろう。真っ赤な肉実がぬんめりした絞りに包まれ、少年は痛みまじりの鋭い喜悦に喉を鳴らす。

「タダシ……大好き」

「……きらら」

それでもキララが呼びかければ、顔を歪めて笑ってくれた。ムッチリ張った膣粘膜が攻撃的にせりあがって、亀頭から根元までを余さず舐める。痺れるくらい気持ちよくて表情が固いものの。必死で笑顔を作ってくれた。

(も……いいや、どうでも。だって)

頭が正常に働かない。分かることはひとつだけ。

(タダシとこうしてられるのは……嬉しいもん)

自然とキララの伸ばした手を掴むタダシ。

子どものころみたいに仲良く手をつないで、二人はこの悪夢の中で見つけた幸せにすがっていた。

だが、

——にゆる、にゆる。

「……？」

手をつないだまま。見つめ合ったまま。

キララの顔に、微妙に冴えないものが宿る。

タダシはだんだん快樂に慣れてきたのか、表情が緩みだしていた。迫りくる膺ヒダを甘受している。

だがいま童貞卒業した彼とちがひ、

(あれ……？ こ、こう……だっけ?)

何度か経験のある少女は、微妙な違和感を覚えていた。

騎乗位自体は経験があった。この前もバスの中でこの格好をしたし、

八月に犯されたとき、アキラを相手に二度子宮に精液注射を受けている。

あのときとなにかがちがう。

なにかが……。

「うあああ痛いつ、痛いつて！」

突如悲痛な叫びがこだました。

見ると教卓に乗せられたライカが、いままさに俊哉によって純潔を削り取られているところだ。

「こっちの穴慣れてなくて。ぐふふつ、でも我慢して。もうちよつとでライちゃんの初めてが……」

「う、う……、ッッ！」

「通った！ ひひひい通ったよ。ライちゃんの処女膜破いてやった。初めての男になったんだ」

歡喜の咆哮をあげる俊哉。

見渡す限りクラスで一番の巨根はアキラだが。太さなら彼にも負けないモノが。根元ま

で処女花を貫いていた。

ライカはもう意識が飛ばんばかりだ。

男子と見まごう胸もお尻もぺったんこな肢体は、性器の形も完全な子どものそれなのに、こんな規格外を相手させられては無理もない。

(ライちゃん……かわいそう。ごめん)

アキラに処女を奪われたキララには、その痛み、苦しみがよく分かる。

(最初からあんな太いの、痛いに決まってるよ)

自分のときを思い出す。泣いて苦しみぬいた……、

(あんな太いのが入ったら)

……自分が巨根に犯されたときを。

(入ったら……)

——ゾクゾクツ。

「ッ!？」

瞬間、得体の知れない喜悦が、タダシのペニスが届いていない子宮から走った。

(な、なにいまの?)

覚えのある感覚……覚えのある気持ち。



「あんだよ、十萌のバージン俺がもらおうと思ってたのに」

ふと聞き覚えのある声が背中に抱きついてきた。

姫妃を足腰立たないくらいいたぶり終えたアキラだ。自分がキララの処女を奪った当時の記憶がないため、タダシとつながる光景に眉をひそめている。

幸せな時間に水を差された。気色ばむタダシ。だがペニスをぬらぬらシメられては、追い払うこともできない。

「大丈夫かー？ ドーテータダシ君じゃ、気持ちよくしてくれないだろ」

「ひ……っ」

キララはキララで、腰にぐりつとあたるものを感じ悲鳴をあげる。

まぎれもなく四ヶ月前、自分の膣道を満たしたものだっただ。

この大きさ。この熱さ。忘れるはずがない。

感じた途端なぜか力が抜けてしまった。

「へへへ、突っ込んでるだけじゃダメだぞ」

記憶はなくても、経験の豊富さを見せつけるよう少女の四肢に腕を絡ませてきた。

「あ、ああん。やめて、放し……ひゃあん」

片方の手がブラウス越しにバストを掴み、片方の手がスカートの中にもぐる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

【電子版】
毎月配信
雑誌版は奇数月
発売!



二次元
ドリームマガジン
DREAM MAGAZINE

コミック O M I C
UNREAL
アバババ

正義の
ヒロイン
姦獄
ファイル

あなたのキモチイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 3D
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキキララ!

女刑事美優
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

呪詛喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターノンノベルズ」
から書籍化!

異世界
デキる
キララ

ドキドキキララフな
ハイルム系
ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫